

夏樹静子

駅に
佇^たつ人



えき た ひと
駅に佇つ人

なつ き しず こ
夏樹静子

© Shizuko Natsuki 1990



講談社文庫

定価はカバーに
表示してあります

1990年7月15日第1刷発行

発行者——野間佐和子

発行所——株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21 〒112-01

電話 東京(03)945-1111(大代表)

Printed in Japan

デザイン——菊地信義

製版——信毎書籍印刷株式会社

印刷——豊国印刷株式会社

製本——株式会社若林製本工場

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部あてにお送りください。
送料は小社負担にてお取替えします。なお、この本の内
容についてのお問い合わせは文庫出版部あてにお願いい
たします。(庫)

ISBN4-06-184717-1



夏樹静子

講談社

目次

雨に佇 ^た つ人	7
湖 ^{うみ} に佇 ^た つ人	79
駅に佇 ^た つ人	141
闇に佇 ^た つ人	209
切実に殺す人 伊藤正孝	284

駅
に
佇^た
つ
人

雨
に
佇^た
つ
人

1

福岡にあるテレビ局のラジオ制作部につとめる前畑青子まえはたせいこが海釣りを始めたのは、チーフディレクターの大西の誘いがきっかけだった。

青子に限らず、同じ班のスタッフ五人は、いわゆる「釣りキチ」と称される大西の熱心な勧誘にひきずられ、大抵二、三回は付合わされていた。中には、たちまちその魅力にとりつかれて、自分もほんものの釣り好きになっていく者もいる。

そんなわけで、三月二十一日土曜の午前五時半にも、博多湾に面した箱崎埠頭はこさきふ頭にある釣り具屋の前に、ヤッケと防水ズボン、ゴムの磯靴という身仕度の大西班の三人がタクシーを乗りつけた。四十をすぎたばかりの大西と、三十四、五の杉、それに青子。彼女はディレクターも兼ねるアナウンサーで、入社五年目、二十七歳になる。

因みに大西班では、月曜から金曜までの午前八時から十二時までの音楽と情報番組を担当

しているので、土曜日はいちばん解放感にあふれている。前日の金曜には、番組終了後、翌週の打合わせ会議をして、いったん帰宅し、一眠りしてから出掛けてきた。

彼岸の連休を前にして、早朝の埠頭は賑わっていた。

出航予定の午前六時になる前から、十数人の釣り人たちが集ったので、船頭は早めに船を出すことにした。

全長十メートル余、定員十五名の船に、船頭を入れて十七人が乗りこんだ。土、日の定員オーバーは少しもめずらしくないのだ。

二十一日福岡地方の天候は、下り坂で、昼間は晴れだが夕方から崩れるという予報が出た。低気圧が接近しているそうだが、誰も気にしている様子はない。せっかくの休日、すっかり準備を整えて張りきっている釣り客たちのムードに押された形で、船頭も出航を決めていた。

というのも、この船は「瀬渡し」といって、沖合いの小島まで釣り人たちを運び、時間がきたらまた迎えに行くやり方である。迎えは午後二時で、三時には帰港する予定だった。

午前五時五十分に箱崎埠頭を離れた瀬渡し船は、うす青い空の下、波静かな博多湾を横切って、玄界灘へ出た。

玄界灘には常時かなりのうねりがある。

一時間ほどして、北西約四十キロの小呂ノ島（おろのしま）に着き、そこの岩場に釣り人たちを降ろした。この季節、付近ではメジナ、チヌ、イサキなどが釣れる。

船は引返して行き、人々はさっそく釣り糸を垂れて、時を忘れた。

青子は今度が四回目で、面白さがわかりかけたところだ。もともとは大分県の山間部で生まれ育ったので、海や潮風が新鮮でたまらない。高校時代から水泳は得意だし、ほとんど船酔いもしなかった。

午前十時頃から陽が翳^{かげ}り、雲がひろがり始めた。

雲はしだいに黒みを増して空全体を被^{おほ}い、昼すぎには雨混りの風が吹き出した。天氣の崩れが予想以上に早くきたようだ。

みるみるうねりが高くなった。

岩場到大波が打ちよせ、一人が危うくさらわれそうになった。

迎えの船が来たのは、午後一時少し前だった。時化^{しけ}てきたので、予定を早めて来たのだ。人々はホッと救われた顔で、いち早く船底に入り、規定通り救命胴衣をつけた。

船は最大速度で博多湾の入口をめざした。

いよいよ風が強くなり、荒模様を呈してきた。定員と重量がオーバーしている船ほど、横波を受けやすい。船は何度も高波をくらって大揺れし、そのつど女性客から悲鳴が上った。

十七人の中には女性が三人混っている。

女に限らず、みんな船酔いと怖さで蒼白な顔をしている。

青子は必死な思いで波間に目を凝^こらしていた。早く玄界島が見えてくればいい。そこからはずぐ博多湾で、湾内へ逃げこめばひとまず安心だろう。

それまで何事もなければいいが。

玄界灘では季節によらず、時々突風が吹くというから――。

鋭い不安が一瞬青子の胸をよぎったのは、まさに予感であったかもしれない。

ヒューッという風音が聞こえたつぎの瞬間、山のような波が横から叩きつけ、船の床が回転するかに感じられた。人々の悲鳴と、激しく船がきしむような音――。

あとはただ無我夢中というしかなかった。

したたか水を飲み、息もたえだえで水面から顔を出した青子の目に、数メートル先で波間に漂っている船底らしいものが映った。転覆した船から投げ出されたのだ。

青子はけんめいに泳ぎ、ようやく舳先^{へさき}に手が届いた。

誰かがその手首をつかんで、船底の上に引きずりあげてくれた。

前後して何人かが泳ぎつき、船底によじのぼった。

「セコちゃん、大丈夫か！」

大西の声を聞いて振り向くと、反対側の船べりに彼がしがみついている。

「はい……杉さんは？」

「こっちにいます。しっかりつかまってるんだぞ！」

その間にも船底へ泳ぎ寄ってくる人があり、手をのぼす者、波間で浮き沈みしている人の頭も見える。容赦なく強風が吹きつけ、荒波が襲^{やうしや}ってくる。十四、五人がかろうじてしがみついている転覆船は、文字通り木の葉のように弄^{もてあそ}ばれた。

「連絡はどうなってるんだ？」

「さっきまで岸と交信してたから、きっと向うで海上保安庁に――」

これは船頭の声だ。

「ただ、この時化では、近付くのが大変だ」

「時間がかかるのか」

「ほかの船が通ってくれば……」

「必ず来るさ。みんな頑張るんだ！」

誰かが大声で怒鳴った。

最初は夢中だったが、しだいに寒さがこたえてきた。防寒具の隙間から流れこんだ海水で、全身ずぶ濡れになっているのだ。

はるか遠くをタンカーのような船が通過するのが見えた。二、三人が「おーい」と叫び、何回かそれを繰り返した。が、船は遠ざかっていくばかりだ。

恐怖と寒さ、それに疲労が人々の上にのしかかってきた。その上たえず大波をかぶっているのだ、ありったけの力でしがみついていないとさらわれてしまう。

と、再び船が大揺れした時、青子の横にいた人の身体が船から離れた。そのまま流されそうになるのを、青子と、向う隣りにいた若い男が危うくつかまえ、どうにかこうにかまた船底にひっぱりあげた。

その人は五十すぎくらいの小柄な男性で、さっき島にいた時、青子は餌えさのことを教えても

らった。

彼はかなり水を飲んだ様子で、ぐったりと船底に押しつけられた横顔が紙のように血の気を失っている。

「大丈夫ですか？」

青子の呼びかけに応えるように、男の唇が動いた。

「わたしはもう、駄目かもしれない」

「そんな、しっかりして」

「わたしは狭心症の持病があつて……薬はどっかへいつてしまったし……」

「氣持をしっかり持つんですよ。必ず助けが来る」

若い男も励ました。そういう彼も、どこか怪我でもしたのか、時折鋭く顔をしかめている。

「いや、これからわたしのいうことを聞いてください」

五十すぎの男が突然頭をもたげた。どこにそんな力が残っていたかと驚くほど、キツとした表情で、青子と、反対隣の男との両方に顔を向け、はっきりした声でいった。

「どうか、よく聞いてください。わたしはこれから遺言をする。船が遭難した時には、ふたりの人に証人になつてもらつて、遺言をすることができるのです」

彼の声はしだいにまた呟くように低くなつたが、その語気には、確固たる意志がこもっているかのようだ。

「こうして乗り合わせたのも何かの縁と思って、どうかわたしの頼みを聞いてください。あなた方が、救助されたら、わたしの遺言を紙に書いて、これからいう人のところへ届けていただきたいのです。いいですか？」

青子と若い男は、思わず目を見合わせ、気圧されたように頷いた。

「必ず頼みますよ。では、遺言をする」

男は一度深く息をついてから、突きつめた呟き声で、一語一語きっぱりといった。

「遺言。わたしはこの遺言によって、子供の認知をする。その子は、現在西唐津に住んでいる周防ユリ子。わたしは周防ユリ子をわが子であると認知する。母親の名は、秀子。——どうか、周防秀子にこの遺言を告げ、私の遺志を実行するようにと、伝えて下さい……」

2

それから四日後の三月二十五日午後二時頃、前畑青子は福岡市の中心、天神駅から西唐津行の地下鉄に乗った。

電車は五つ目の藤崎をすぎて地上に出、二つめが姪浜。市街地の西端部である。

正確には、姪浜までが地下鉄で、そこから先は筑肥線に乗り入れるのだ。

筑肥線は、博多湾岸から糸島半島の付け根を横切り、つぎには唐津湾に沿って終点の西唐津へ達している。